

イスラーム文献が伝える多様なゾロアスター教像

——六—八世紀のアラビア語資料のゾロアスター教研究への応用——

青 木 健

△論文要旨▽ ゾロアスター教研究の資料には、六—一〇世紀に執筆された内部資料であるパフラヴィー語文献と、その他の言語による外部資料がある。外部資料の研究としては、ギリシア語・ラテン語、シリア語、アルメニア語、漢文、近世ヨーロッパ諸語などの資料ごとに纏まったコーパスがあるものの、アラビア語資料を用いた本格的な研究は依然としてなされていない。本論文は、アラビア語資料を完全に網羅した訳ではないが、ある程度の資料に当たって、アラビア語資料によるゾロアスター教研究の方向性を示した試論である。暫定的な結論として、サーサーン王朝時代のペルシア帝国領内のゾロアスター教は一枚岩ではなく、各地方ごとのゾロアスター教が存在したこと、パフラヴィー語文献は、そのうちのイラン高原南部のゾロアスター教を代表するに過ぎないこと、メソポタミアやイラン高原東部のゾロアスター教の実態は、却ってアラビア語資料から類推できることが判明した。

△キーワード▽ ゾロアスター教、イスラーム、アラビア語文献、外部資料、多様性

一 外部資料から見たゾロアスター教研究

1 ゾロアスター教研究における外部資料

ゾロアスター教史を概観すると、彼ら自身による文献資料が、全時代を通じて均質に残されている訳ではないことに気が付く。ゾロアスター教は、教祖の生存年代（推定紀元前一二—九世紀）から言えば世界最古の宗教に属するに

表1 ゾロアスター教研究資料一覧表

言語	時代	地域
ギリシア語・ラテン語資料	ハカーマニシュ王朝 ～アルシャク王朝時代	イラン高原西部 ～メソポタミア平原
サンスクリット語資料	アルシャク王朝時代	インド亜大陸
シリア語資料	サーサーン王朝時代	イラン高原西部 ～メソポタミア平原
アルメニア語資料	5世紀以降	アルメニア高原
パフラヴィー語資料	6～10世紀	イラン高原南部
漢文資料	唐王朝～宋王朝時代	主として華北～西域
アラビア語資料	ジャーヒリーヤ時代 ～アッバース王朝時代	中央アジア～イラン高原全般 ～メソポタミア平原
近世ヨーロッパ諸語資料(1)	ルネッサンス～16世紀	ヨーロッパでのイメージ
近世ヨーロッパ諸語資料(2)	17～18世紀	イラン高原とインド亜大陸

も拘わらず、『アヴェスター』が文献として成立したのは六世紀、それ以外のパフラヴィー語文献の作成時期は六一〇世紀に集中しており、それらがカバーしていない期間については、彼ら自身による情報を欠く。更に、それらの内部情報は、サーサーン王朝時代にゾロアスター教神官団の中で優位な位置を占めたペルシア州の神官団の手になるもので、他の時代、他の地域のゾロアスター教との整合性も問題になる。即ち、ゾロアスター教は、文献資料的には比較的新しく、しかも文献伝達の経路がペルシア州の神官団に偏った宗教なのである。

そこで、ゾロアスター教研究では、これらの内部資料の他に、外部の観察者が残した記録が応用される。それらは時代も地域も一様ではなく、それらをハーマナイズして統一したゾロアスター教像を描ける訳ではない。しかし、時代別・地域別に多様だったゾロアスター教の実態を研究する上で、貴重な手掛かりになっている。ゾロアスター教研究資料の一覧表としては、表1を参照。

2 外部資料の先行研究

次に、以上の外部資料を蒐集した先行研究を概観しておこう。西欧人は、ゾロアスター教の実像を探るために、古くからギリシア語・ラテン語資料におけるゾロアスター教関連の記述を研究していた。それらを網羅した最新の研究書としては、ヨンクの『マギの伝統——ギリシア語・ラテン語資料におけるゾロアスター教⁽¹⁾』を参照。

古代インドのサンスクリット語文献中には、特異な太陽信仰カルトに関する記述がある。彼らをイラン高原からの移住者とするか、インド亜大陸に土着の集団とするかで、研究者の意見は分かれている。前者だとすれば、彼らは、アルシャク王朝時代にイラン高原上のアーリア人の宗教集団がインド亜大陸に流入した後裔だと考えられる。

代表的な研究としては、足利惇氏の『古代印度に於けるイラン文化の影響に関する文献学的研究⁽²⁾』と、シュティーテンクローンの『インドの太陽神官サーンバとシャーカドヴィーピーヤ・ブラーフマナー——インドの太陽カルトに関する文献批判的・宗教史的研究⁽³⁾』を参照。

サーサーン王朝時代に東方シリア教会がペルシア帝国西部で布教活動を行うと、彼らによるシリア語殉教者列伝にも、ゾロアスター教神官に関する記述が見られるようになる。大部分は、キリスト教徒を迫害するステレオタイプなゾロアスター教神官像であるが、固有名詞や位階などの点で貴重なデータを提供している。これに関する最新の研究としては、ウィリアムスの『ゾロアスター教とキリスト教⁽⁴⁾』を参照。

アルメニアは、本来は原始アーリア人の宗教の亜流を奉じていたものの、四世紀以降、サーサーン王朝ペルシア帝国とビザンティン帝国の激しい争奪戦の渦中で、徐々にキリスト教化していった。従って、アルメニア語資料の中には、イラン高原で正統の位置を占めた「ペルシア的ゾロアスター教」とは別種の「アルメニア的ゾロアスター

教」の痕跡を伺うことができる。それらを網羅した最新の研究書としては、ラッセルの『アルメニアのゾロアスター教』⁽⁵⁾を参照。

これらイラン高原西部以西のゾロアスター教外部資料の研究に対し、中国人学者や日本人学者は、二〇世紀初頭以来、漢文資料に依拠して、中央アジアから来華したソグド人が奉じる「ソグド的ゾロアスター教」の研究を行ってきた。それら漢文資料を蒐集した最新の研究書としては、張小貴の『唐宋祆教的華化形態』⁽⁶⁾を参照。

ルネッサンスから一六世紀までの西欧におけるザラスシュトラ像の変遷を扱う研究は多くない。この時期の西欧のザラスシュトラ像は、西欧古典資料に依拠した「東方の賢人」イメージが一人歩きした感があり、ゾロアスター教研究というより、西欧宗教思想史上の問題と捉えられた為である。それらの「東方の賢人」イメージを網羅した最新の研究書としては、シュタウスベルクの『ザラスシュトラの誘惑——ゾロアスターと前近代のヨーロッパ宗教思想史』⁽⁷⁾を参照。

一七—一八世紀のヨーロッパ人旅行者のゾロアスター教徒観察記録に至って、やっとイラン高原とインド亜大陸で実際のゾロアスター教徒に接した報告が出現する。それらの旅行記資料を集成した最新の研究書としては、フィルビーの『一七—一八世紀におけるヨーロッパ人旅行者と彼らのゾロアスター教徒観察』⁽⁸⁾を参照。

3 先行研究の問題点

このように、ギリシア語・ラテン語、サンスクリット語、シリア語、アルメニア語、漢文、近代ヨーロッパ諸語によるゾロアスター教関係の資料については、シリア語関係がやや弱いものの、総じて博士論文級の重量感ある研究成果が公表されている。しかし、アラビア語資料についてのコーパスは、管見の及ぶ限りでは存在しない。最も

性質の近い研究としては、チヨクスイーの『紛争と共存——中世イラン社会におけるゾロアスター教徒被支配階級とムスリム支配階級⁽⁹⁾』があるが、社会的なアプローチを目的としており、アラビア語資料の網羅的な蒐集とゾロアスター教の宗教思想史的な分析を意図してはいない。

これには、幾つかの理由があると考えられる。第一に、他の言語による外部資料は数が限られるのに対し、アラビア語資料は六世紀以降、膨大な数量が執筆されている点。即ち、アラブ人ムスリムは、七世紀にサーサーン王朝ペルシア帝国を倒してイラン高原に進駐し、占領軍として直接ゾロアスター教徒と接しつつ大量の文献を残した。後に改宗したアーリア人ムスリムも、近世ペルシア語ではなくアラビア語を用いて、父祖の宗教について書き残した。従って、その総数は他言語の外部資料の比ではなく、ゾロアスター教関連のイスラーム・アラビア語資料コーパスを作成するのは、量的に難しい状況にある。

第二に、これらのイスラーム・アラビア語資料は、六—一〇世紀をカバーするパフラヴィー語資料と時期的に重なってしまい、それらの補助資料として用いられる傾向が強かった点。同じ時代をカバーするのであれば、パフラヴィー語文献の方が優先され、イスラーム・アラビア語文献は、ゾロアスター教研究者からそれほど省みられなかった。

第三に、学問領域として、古代ペルシア研究・ゾロアスター教研究は、中世アラブ研究・イスラーム学とはやや疎遠で、ゾロアスター教を専攻しつつイスラーム・アラビア語資料を用いる研究者が少なかった点。

4 本稿の課題

このように、ゾロアスター教研究上、内部資料（ゾロアスター教パフラヴィー語文献）と外部資料（イスラ

ム・アラビア語文献）が時代を同じくして大量に残っているのは、六―一〇世紀だけである。筆者の考えでは、内外の資料が輻輳して最も充実したゾロアスター教研究が期待できるのは、初期イスラーム時代を描いて他にない。しかし、それにも拘らず、イスラーム・アラビア語資料中からゾロアスター教関係の言及を抽出したコーパスの作成は、依然として試みられていない。

本稿は、チヨクスイーの先行研究を参考にしつつ、筆者の目の届く範囲内で主要なイスラーム・アラビア語文献を参照し、そのみに依拠して六―一〇世紀のゾロアスター教を再構成する試みである。集められたデータは、将来完全なコーパスとして完成されるべき「ゾロアスター教に関するイスラーム・アラビア語資料」の中から取捨選択された材料であり、結論は暫定的である。それでも、この時期のゾロアスター教研究に、新しい資料を用いて一定の見通しを示すことは可能であると思う。そして、現にパフラヴィー語文献に依拠したゾロアスター教像とは、時代を同じくするにも拘らず、全く異なったゾロアスター教像を提示することができたと考えられる。

二 アラビア語古詩の中のゾロアスター教

1 ゾロアスター教研究資料としてのアラビア語古詩

チヨクスイーは参照していないが、ジャーヒリーヤ時代からウマイヤ王朝時代まで継続したアラビア語古詩の伝統が、『クルアーン』を除く現存アラビア語文献の最古層をなしている。その中でも、ジャーヒリーヤ時代のアラビア語古詩をゾロアスター教研究に応用できた場合、パフラヴィー語文献さえカバーしていないフスラウ一世時代（在位五三二―七九年）以前の状況を示す資料として、その価値は測り知れない。また、ジャーヒリーヤ詩人たちが

接したゾロアスター教徒は、イラン高原本国のゾロアスター教徒ではなく、メソポタミアに移住したゾロアスター教徒だったと予想されるので（一四二頁の地図参照）、この地域性の点からも、ペルシア州の神官団が執筆したパフラヴィー語文献を補う役割を果たす。

これらのアラビア語古詩からゾロアスター教への言及を探る場合、最も便利な資料は、セルジューク王朝時代のバグダード・ニザーミーヤ学院のアラビア語教授だったジャワーリキー（二〇七三―一二四四年）の大著『アラビア語古詩中の外来語研究』である。彼は、アラビア語古詩の中の外来語を摘出することに情熱を傾け、各外来語ごとにそれを含むアラビア語古詩を引用して本書を完成した。⁽¹⁰⁾ その為、パフラヴィー語や近世ペルシア語の知識がある研究者なら、見出し語を追うことで容易にアラビア語化されたイラン語を引き出し、アラビア語古詩におけるそれらの用例を把握することができる。

筆者が、本書の最新エディションとされるシャーキル版⁽¹¹⁾を参照したところ、ゾロアスター教パフラヴィー語のアラビア語転訛として、「ヘールベド神官 (al-Hirbidh)」、「マギ (Majus)」、「ズールとズーン (az-Zūr wa az-Zūn)」、「ザンダカ主義 (Zindiq)」などが立項されていた。本稿では、紙数が限られているので、「ヘールベド神官」と「ズールとズーン」を取り上げよう。

2 ヘールベド神官について

先ず、ヘールベド神官については、同書三九九頁に下記のようにある。

Wa al-hirbidhu bi-l-kasri, wāhidu l-harābidhati. Wa hum khadammu n-nāri...⁽¹²⁾ wa mishyatu-humu l-hirbidhā. gāla Imrū'u l-Qaysi.

Idhā zā'a-hu min jānibīhi kilay-himā

Mashā l-Hirbidhā fī daffī-hi thumma farfarā

「ヒルビズ」とは「ハラービザト」の単数形で、火に仕える者である。…中略…彼らの歩き方は、「ヒルビズの」である。イムルウ・ル・カイスは詠んでいる。

「両側面からそれ（馬か駱駝？）を蹴れば、

それはヒルビズのようにバタバタと急ぎ足で歩き、それから（興奮で）ブルルンと体を震わせる」

ここに引用されたイムルウ・ル・カイス（五五五年没？）は、ジャーヒリーヤ時代のキンダ族の王子で、父が殺害されてからはビザンティン帝国へ亡命して復讐を誓ったものの、志半ばでアンカラ付近に落命した詩人である。⁽¹²⁾ 彼がペルシア帝国領へ足を踏み入れた形跡はないので、彼のヘールベド神官に関する情報は間接的なものであろう。

当時のアラビア詩人が「ヘールベド神官」を知っていたとしても、パフラヴィー語文献に記載されているようなイラン高原本国のゾロアスター教神官である可能性は低い。寧ろ、ペルシア帝国から見たら植民地であるメソポタミア平原へ移住して、現地のセム系アラム人と混交したゾロアスター教神官が目に留まったと考えられる。即ち、六世紀のアラブ人の可視範囲にいるメソポタミア平原のゾロアスター教神官は、パフラヴィー語「ヘールベド」が訛った「ヒルビズ」の名称で知られ、且つ、彼ら独特のバタバタした歩き方は周知の事実だったことになる。

3 ズーンについて

ズーンについては、同書二一四頁に下記のようにある。

Wa az-Zūru wa az-Zūnu. as-Šanamu... 中略... qāla Humaydun

Da'ba l-Majūsi 'akafat li-z-Zūni

Wa qāla al-ākhiru

Yamshi bi-hā al-baqaru l-mawshiyu akuru'-hu

Mashya l-Harābidhi hajū bay'ata z-Zūni

「ズール」や「ズーン」とは、偶像である。…中略…フマイドは、こう詠んでいる。

「マギの習慣として、それ（マギ）はズーンに専心するものである」

また、別（の詩人）ジャリールのことは、こう詠んでいる。

「その足を飾り立てられた牛は、それ（マギ？）と共に

ヒルビズ風の歩き方でズーンの神殿に巡礼した」

ジャワリーキーは、ここで「ズール」と「ズーン」の二つの単語をペアで立項しているが、挙示されたアラビア語古詩には「ズーン (zwn)」のみが用いられている。また、直前には、「ズールとは（アラビア語で）力の意味である」と、ズールに関する短い解説が置かれている。これらから類推すると、「ズール」は、写本の錯簡で、「ズーン」の項目に紛れ込んだのかも知れない。本稿での考察は、後者のズーンに絞ろうと思う。

最初に引用されたフマイド（七〇九年没）は、第三代カリフ・ウスマーンへの哀悼詩で名高く、ウマイヤ王朝も半ばに没した⁽¹³⁾。いわば、ジャーヒリーヤ時代から初期イスラーム時代への過渡期を生きたアラビア語詩人といえる。その彼が、明確に「マギはズーン (zwn) に専心する」と詠んでいる以上、彼自身が実見したか、アラビア詩人の間でそのような一般了解があったかである。

次に引用されたジャリール（七二九年没）は、六五三年に生まれ、バスラ総督ハッジャージュ・イブン・ユースフ（七一五年没）の客人となって同地に生きた詩人である。⁽¹⁴⁾ この経歴から、彼の活動地域はメソポタミア南部に絞られる。その彼が「ヘールベドたちの道を通ってズーンに巡礼する」と詠んでいるので、七世紀後半から八世紀前半のメソポタミア南部では、依然としてヘールベド神官がズーンを崇めていたのかも知れない。また、牛はゾロアスター教では神に捧げる最大の供物だから、「その足を飾り立てられた牛もズーンに巡礼する」とは、犠牲獣としてズーンの神殿に運ばれていく牛を指すと推測される。

而して、両詩人が共通してマギやヘールベド神官の崇拜対象としているズーン（*zwn*）とは、何であろうか。フマイドはマギの崇拜対象であるとし、ジャリールの詩からは「ヘールベド神官が祀り、牛まで巡礼に行く（＝牛が犠牲に捧げられる）」ことが読み取れる。従って、ズーン（*zwn*）がゾロアスター教の神格の一種であることは、ほぼ確実と考えられる。おそらく、メソポタミア平原付近のゾロアスター教神官が崇拜していた神で、イラン高原本国の「ゾロアスター教偶像破壊運動」を免れて神殿に安置されていた何かだと思われる。しかし、ズーン（*zwn*）という神は、パフラヴィー語文献では知られていない。

その解釈には、現時点では二つの可能性がある。一つは、ヴィデングレンが一九六〇年代から注目しつつも、その後は殆ど検討されなかった「ザーブリスターンの神ズーン」と一致する可能性である。彼は、中国語資料やアラビア語資料に依拠して、イラン高原東部のザーブリスターン州では、魚をシンボルとして祀るズーンの神とその神殿があったことを指摘している。⁽¹⁵⁾ アラビア語古詩の中のズーンは、音の上ではこれと一致するし、偶像を祀っていたとの記述も矛盾しない。この場合、ペルシア帝国の東西で相呼応して、ゾロアスター教神官が魚の偶像を崇めて

いたことになる。

もう一つは、*zwn* がゾロアスター教の時間の神ズルヴァーンのアラビア語化された形に当たる可能性である。⁽¹⁶⁾ 周知のように、ズルヴァーン主義とは、メソポタミアから小アジア一帯で、原始アーリア人の宗教とバビロニアの宗教が混交して成立した折衷宗教である。しかし、彼ら自身は一切文献資料を遺していないし、上述のようにパフラヴィー語文献はペルシア州のゾロアスター教神官を経由して伝わっているので、ズルヴァーンに関する記述は完全に欠落していた。しかし、仮に、*zwn* が *zrw'n* のアラビア語転訛だとすれば、六世紀頃のメソポタミアでは、同教が依然としてゾロアスター教神官によって崇拜され、しかも偶像として祀られていた有力な証拠となる。

4 メソポタミア的ゾロアスター教

チョクスイーは、上掲の著書の中で、「フーゼスタン州に移住したゾロアスター教徒は、現地のセム系住民と混交し、アラム語やアラビア語とのバイリンガル化、トライリンガル化していったであろう」との推測を述べている。⁽¹⁷⁾ だが、ペルシア帝国西部地域でゾロアスター教徒がセム系民族と混交した可能性は大にあるものの、具体的証拠を欠くので、彼はそれ以上の考察には踏み込んでいなかった。

しかし、ここに、六―八世紀のアラビア語詩人たちが認識していたゾロアスター教徒像を示す資料が提出された。それによると、彼らが目撃したゾロアスター教神官たちは、バタバタと特徴的な歩き方をし、ズーン (*zwn*) の神に牛を犠牲として捧げ、その偶像に熱心に祈っていることになる。そして、これに該当する神格は、ザーブリスタン州で崇拜されていた魚の神の偶像か、メソポタミアで崇拜されていた時間の神ズルヴァーンである可能性が指摘された。

これは、パフラヴィー語文献から予想されるような、「聖火を介して善神アフラ・マズダーに祈りを捧げる」という正統的なゾロアスター教神官像からは、かなりかけ離れている。おそらく、サーサーン王朝ペルシア帝国領内では、パフラヴィー語文献に見られるような「ペルシア的ゾロアスター教」が、広域に亘って水平に広がっていた訳ではなかった。少なくとも、メソポタミア平原では、「ペルシア的ゾロアスター教」とは異質の「メソポタミア的ゾロアスター教」が信仰されていたと考えるべきである。

三 アラブ人ムスリムの占領記の中のゾロアスター教

1 ゾロアスター教研究資料としてのアラビア語占領記

アラビア語古詩に次ぐイスラーム・アラビア語資料としては、アラブ人ムスリム軍による旧ペルシア帝国領の占領記が来る。これらを扱う為には、予備知識として、アラブ人ムスリム軍によるペルシア帝国征服史を概観しておかななくてはならない。

チョクスイーによると、⁽¹⁸⁾ アラブ人ムスリム軍は、メソポタミア平原を制圧後、二手に分かれてイラン高原の南北に侵攻した。この侵攻は成功し、侵攻ルートそのままに、アラブ人ムスリム軍がイラン高原の各都市に数珠繋ぎに駐留する占領体制が布かれた。この占領軍の規模は地域によって差があったようで、潜伏しない異民族に隣接するアルダビール（対クルド人、ハザル人）、カズヴィーン（対ダイラム人）、メルヴ（対トルコ人）など、主にイラン高原北部・東部の諸都市には、大規模な占領軍が駐留した。逆に、直接異民族と接しないイラン高原南部の諸都市では、占領軍の数は少なかったとされる。この状況が直ちにアラビア語占領記中のゾロアスター教情報の多寡に反

イスラーム文献が伝える多様なゾロアスター教像

表2 アラブ人ムスリム占領軍とゾロアスター教神官団の分布表

	イラン南部	イラン北部	イラン東部
アラブ人ムスリム占領軍の駐留規模 ≡アラビア語文献の情報量	少	多	多
(ペルシア的)ゾロアスター教神官団の残存度 ≡パフラヴィー語文献の情報量	多	少	少

映する訳ではないが、予想される傾向としては、直接ゾロアスター教徒に接触する占領軍が多いイラン高原北部・東部では、それに従って情報量も多く、逆に占領軍が少ない南部では、情報量も少ないと考えられる。

これに対して、ペルシア帝国崩壊後も残存したゾロアスター教神官団の分布は、イラン高原南部のペルシア州を基盤とし、逆に北部や東部では堅牢な組織が存在した形跡がない。彼らが現存のゾロアスター教パフラヴィー語文献を作成したので、そこに記された情報は、当然、イラン高原南部の状況に偏っていると推測される。以上の分布を図示すると、表2のようになる。

従来のゾロアスター教研究では、ペルシア州の神官団によるパフラヴィー語文献の記述を、そのまま旧ペルシア帝国領全域に当て嵌めて考えていた。しかし、以下では、主にアラブ人ムスリムの観察記録とゾロアスター教パフラヴィー語文献の記述が食い違う事例を抽出し、その差異の理由を追究したい。

参照すべき年代記の数は多いが、今回は、下記の二つのアラビア語文献の占領記部分に、考察の範囲を限定した。

- ・タバリ（九三三年没）の『預言者と国王の年代記』
- ・ビールーニー（一〇五〇年以降没）の『諸国年代記』

前者は、イラン高原北部のタバリストン州に生まれ、ライイで修学した学者。後者

は、中央アジアのホラズム州に生まれ、一貫してイラン高原東部で活躍した学者。両者ともに、パフラヴィー語文献がカバーしていない地域の情報を豊富に提供してくれる筈である。

2 聖典も預言者も否定するホラーサーン州のゾロアスター教徒

既にチヨクスイーも指摘しているように、⁽¹⁹⁾タバリーの『預言者と国王の年代記』の校訂版によると、七三七―三八年にバルフで開かれたメフラガーンの祝宴で、⁽²⁰⁾以下のような発言があった。

それから、デフカーン（ヘラートの地主貴族）は、立ち上がって演説し、こう述べた。「アッラーが（占領軍の）司令官閣下を嘉し給わんことを。我々イラン人は、この世界を四〇〇年間統治した。我々はそれを、中庸と叡智と威厳を以って治めた。（しかし、）我々には、理性的に語る啓典も、神から遣わされた預言者もない！

〔laysa fi-nā kitābun nātiqun wa lā nabiyun mursalin〕

ここで発言しているヘラートの地主貴族は、メフラガーンの祝宴に出席している以上、ゾロアスター教徒と考えられる。そして、パフラヴィー語文献によれば、ゾロアスター教に『アヴェスター』と預言者ザラスシュトラ・スピターマがあることは、自明の真理である。それにも拘わらず、このヘラートの地主貴族が「我々には啓典も預言者もない」と陳べ、一緒に祝宴に主席しているイラン高原東部の他の地主貴族たちからの反論が記録されていないのは、何故だろうか。

筆者としては、『アヴェスター』は、ゾロアスター教徒の聖呪を六世紀にペルシア州の神官団が編集した文献であって、それが必ずしも八世紀のホラーサーン州まで浸透していなかったのではないかと思う。また、ザラスシュトラは、パフラヴィー語文献の中では預言者として扱われているものの、イラン高原東部では別の捉え方をされて

いた可能性がある。

3 マギを否定してザラスシュトラを信じるホラーサーン州のゾロアスター教徒

上記の宴会の約一〇年後、同じホラーサーン州でゾロアスター教徒の叛乱が発生した。七四七―四九九年に、ネーウ・シャープフルの街で、ゾロアスター教神官ベフ・アフリード・イー・マーフ・フラヴァルデーニに率いられた武装蜂起が起こったのである。

先行研究は、この叛乱の宗教思想的な意義に殆ど注目していない。チョクスイーは、イスラーム教徒や「通常の」ゾロアスター教徒と対立する「異端の」ゾロアスター教徒の叛乱と見做した⁽²¹⁾。彼の師のフライも、この時期にイラン高原北部や東部で頻発していた一連のゾロアスター教徒による叛乱――スインバードの乱（七五五年、ホラーサーン州）、ウスターズ・スイースの乱（七六七―六八年、ホラーサーン州）、ムカンナーの乱（七七五―八三年、ホラーサーン州）、バーバクの乱（八一六―三八八、アゼルバイジャン州）など――の一環と捉え、これら全てを、宗教的外皮を纏った政治的騒擾と見た。⁽²²⁾

しかし、これらを単なる「異端ゾロアスター教」と捉え、或いは「経済的不満による武装蜂起」と考えるのは、この時期のイラン高原東部のゾロアスター教の重要な局面を見落としてしまうことになると思う。筆者が参照した限りでは、ベフ・アフリードの思想を知る手がかりが、ビールーニーの『諸国年代記』の中の「偽預言者伝」に見出せる。⁽²³⁾

彼（ベフ・アフリード）は、彼の経歴の初期に、中国（as-sin）に七年間隠れていた。それから（ホラーサーンに）帰ってきた。…中略…彼が自ら預言者と称して教えを説いた時、マギの中の多くの者が彼に従った。

彼は、大部分の宗教法でマギとは違っていたが、それでもザラスシュトラ (Zaradusht) を篤く信じた。…中略…

彼は、彼らの為にペルシア語で啓典を執筆し、彼らに片膝立ちで太陽の本質を崇拝するように、何処にいても太陽を拝むように、思念を凝らすように、食事の際の聖呪 (zanzamah)、小動物の犠牲、飲酒、作法によらずに急死した動物の肉の食事、母親や娘や姉妹や姪と結婚を…中略…廃止するように命じた。

この報告によると、ベフ・アフリードは、イラン高原東部のネーウ・シャープフル近郊の出身であるが、青少年期を「中国 (as-Sin)」で過ごしたとされる。ここで云う「中国」が、漢民族の居住する地域を指すのか、ソグド人のコロニーが点在した西域諸都市を指すのかは定かではないが、本人がアリア人だった点を考慮すれば、ソグド人コロニーと受け取る方が自然である。つまり、ベフ・アフリードは、イラン高原東部からソグド人系の文化の中で彼の思想を熟成させたとみるべく、イラン高原南部のペルシア的なゾロアスター教から乖離する可能性を予め内包していたことになる。

次に、彼の思想を検討してみよう。彼は、ザラスシュトラを篤信していたというので、本人の主観の上では敬虔なゾロアスター教徒だったに違いない。しかし、「大部分の宗教法でマギとは異なっていた」というのは、要するに彼は「ザラスシュトラの教え」と「マギの宗教法」を切り離して捉えていたということである。ここで注目すべきは、ベフ・アフリードが禁止している条項とは、食事の際の聖呪や動物の犠牲、最近親婚など、歴史的にはイラン高原西部に発する宗教法である点である。ペルシア的ゾロアスター教は、イラン高原西部のマギの習慣とイラン高原東部のザラスシュトラの原始教団の教えのアマルガムであり、パフラヴィー語文献中では両者は渾然一体と

なっている。しかし、意外なことに、ベフ・アフフリードは両者をほぼ正確に区別し、イラン高原西部の伝統を排する形で「ゾロアスター教」を唱えているのである。しかも、その内容は、非常にプリミティブではあっても、原始アーリア人の宗教思想に近い太陽崇拜である。ここから見ると、ベフ・アフフリードの思想は、単純に「異端」に分類されるようなものではなく、彼の主張にはそれなりの歴史的根拠があり、ある意味では最も正統的なイラン高原東部のゾロアスター教思想を表明したものと思われる。

最後に、彼が「彼らの為に啓典をペルシア語で執筆した (wada'a la-hum Kitāban bi-l-Fārisiyati)」との記述を考察しよう。六世紀には既にペルシア州の神官団が作成した『アヴェスター』が存在した筈なので、屋上屋を架すようにしてベフ・アフフリードが啓典を執筆したというのは、ゾロアスター教史上は不思議な記述である。だが、先のヘラートの地主貴族の発言と照らし合わせると、重要なことに気がつく。即ち、今までの研究者は、自明の前提として、イラン高原南部で成立した『アヴェスター』は、恰も聖書やクルアーンのように、全てのゾロアスター教徒に承認された聖典であると考えていた。しかし、実はイラン高原東部では全く認知されていなかったのではないだろうか。だからこそ、ベフ・アフフリードは、イラン高原東部の宗教思想を、パフラヴィー語で文字化する余地があったと考えられる。

4 ホラーサーンのゾロアスター教

アラブ人ムスリム占領下のゾロアスター教徒を研究したチョクスイーは、「八―九世紀には、ゾロアスター教徒は、彼らの先祖と同様に、彼らの聖典は神の啓示に由来すると固く信じていた⁽²⁴⁾」と述べている。しかし、この見解は、ペルシア州の神官団が書いたパフラヴィー語文献のみに依拠し、その他の宗教現象を全て異端と見做している

点で、ゾロアスター教研究としては少々一面的かも知れない。確かにイラン高原南部ではそのような状況にあっただろうが、アラビア語資料によれば、イラン高原東部は全く異なる状況を示しているのである。

先ず、一般信徒レベルでは、『アヴェスター』を知らなかったか、知っていても「理性的に語る聖典」とは考えていなかった。また、ザラスシュトラを知らなかったか、知っていても「神から遣わされた預言者」とは見做していなかった。

次に、神官レベルでも、『アヴェスター』を知らなかったようであり、このことは、文字化した『アヴェスター』がこの地域まで普及していなかったのではないかと思わせる。また、ザラスシュトラを信じていたことには間違いないが、彼の教えをどう捉えるかについては、パフラヴィー語文献に表明された教義とは大きく異なっており、イラン高原西部の習慣を排し、原始アーリア人の宗教に近い太陽崇拜を信じていた形跡がある。

これらイラン高原東部のゾロアスター教徒が、サーサーン王朝崩壊から一〇〇年の間に、急激に教義を転換したとは考え難い。即ち、イラン高原東部のゾロアスター教徒は、控えめに言っても、サーサーン王朝時代からイラン高原南部のゾロアスター教徒とは違う教義を持っていた可能性がある。今後は、今まで旧ペルシア帝国領内で普遍的と捉えられていたパフラヴィー語文献に表明されたゾロアスター教を「ペルシア的ゾロアスター教」として局地化し、アラビア語資料に見られるイラン高原東部の「異端的」ゾロアスター教を、それと同等の権利を持ってゾロアスター教を名乗ることのできる「ホラーサーンのゾロアスター教」と考えるべきではないだろうか。

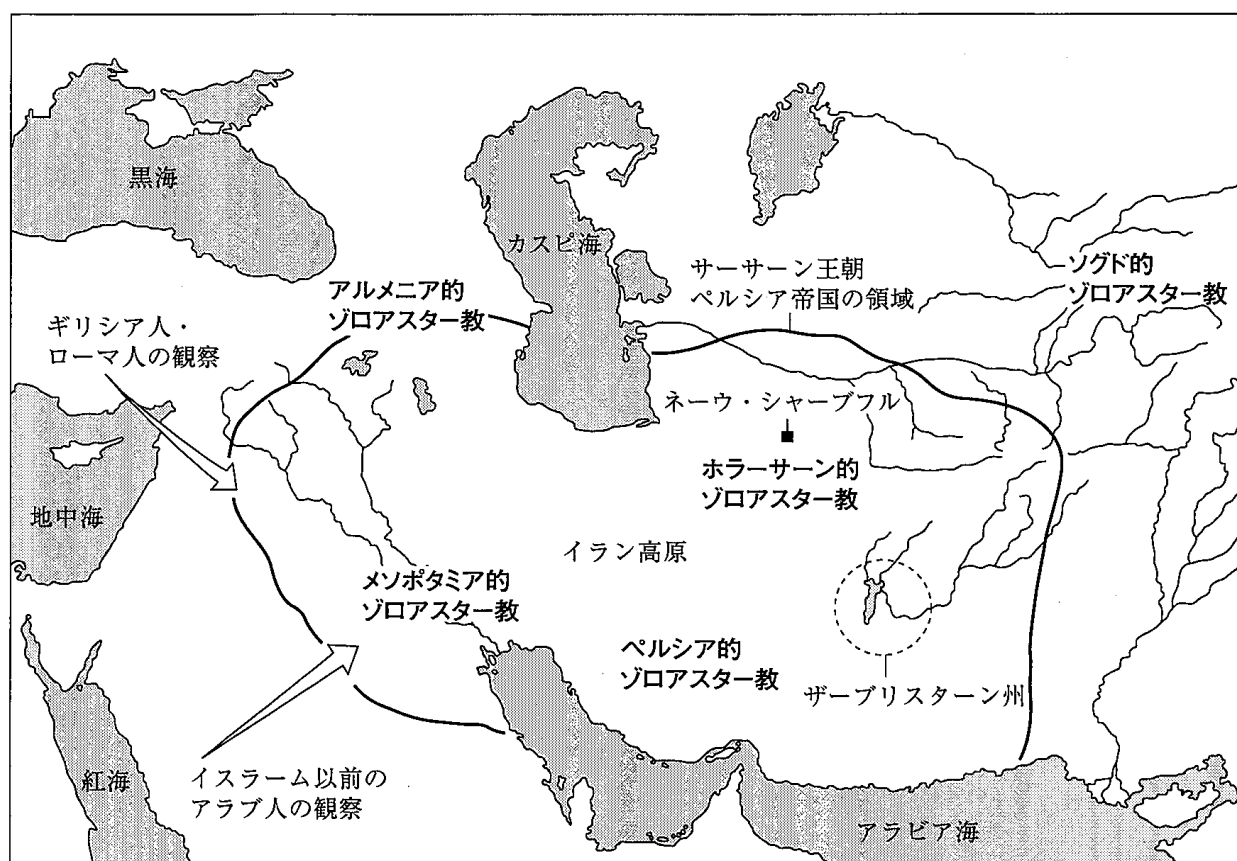
四 まとめ——「多様なゾロアスター教 (Zoroastrianisms)」——

1 「一枚岩の国家宗教」の幻想

ここまで見てきたところは、アラビア語古詩とアラブ人ムスリム軍の占領記という外部資料から伺える、僅かなゾロアスター教徒像に過ぎない。それでも、六―八世紀のメソポタミアでは、ズーンの神の偶像に仕えるゾロアスター教神官の姿を垣間見ることができたし、八世紀のイラン高原東部では、『アヴェスター』を知らず、マジ的な習慣を否定するゾロアスター教神官を見出すことができた。

このことは、従来のゾロアスター教研究における、「サーサーン王朝時代のペルシア帝国領内には、パフラヴィー語文献に見られるようなゾロアスター教教義が均質に広がっていた」との前提に再検討を迫るものである。筆者の考えでは、パフラヴィー語文献は、サーサーン王朝領全域で公認されていたゾロアスター教教義を書き記した文献ではなく、単にペルシアの神官団内部で共有されていた教義を記した文献である。彼らが偶々文献作成に長じていた為、彼らの教義だけがクロースアップして現代まで伝えられ、その結果、近現代のゾロアスター教研究の主たる対象となったと思われる。

即ち、サーサーン王朝時代のペルシア帝国領には、一般アーリア人に根付いた「一枚岩の国教」は存在せず、実際には、多種多様な原始アーリア人の宗教の潮流が、ペルシア州の神官団を頂点とする組織によって「ゾロアスター教」の名の下に緩やかに統合されていた可能性が高い。そして、多様なゾロアスター教の実像を知る手掛かりは、ゾロアスター教パフラヴィー語文献の中にはなく、却って外部資料の中に隠されている。



それらの外部資料の中で、既にギリシア・ラテン語資料、サンスクリット語資料、アルメニア語資料、漢文資料などは網羅され、「アルメニア的ゾロアスター教」や「ソグド的ゾロアスター教」研究において、重要な成果を生み出した。而して、未開拓の重要な資料が、「メソポタミア的ゾロアスター教」や「ホラーサーンのゾロアスター教」をカバーするイスラーム・アラビア語文献であり、それらの中に、更に多様なゾロアスター教を掘り起こす鍵がある。以上が本稿の結論であり、本論文で提案されたゾロアスター教像を概念的に図示すると上掲の地図のようになる。

2 今後の研究課題

以上のような見通しは、しかし、ゾロアスター教について記したイスラーム・アラビア語文献の一部に基づいて得られたものである。今後は、ゾロアスター教に言及したイスラーム・アラビア語資料を完全にリスト・アップして網羅性を期し、上記以外にも予想される「アゼル

バイジャン的ゾロアスター教」や「ザーブリスターンのゾロアスター教」などについても考察していく必要がある。また、チヨクスイーが指摘したような、ゾロアスター教徒を啓典の民と認めるか否かのイスラーム法学論争⁽²⁵⁾も、この角度から再検討していく必要がある。これらを終えて初めて、パフラヴィー語文献を基準にとつてそれとの整合性を追究するゾロアスター教研究ではなく、アラビア語資料を用いて旧ペルシア帝国の各地方ごとの多様なゾロアスター教の存在を前提としたゾロアスター教研究が誕生すると考えられる。

注

- (1) Albert de Jong, *Traditions of the Magi: Zoroastrianism in Greek and Latin Literature*, Leiden/ New York/ Köln, 1997. ユトレヒト大学神学部へ提出の博士論文。
- (2) 足利惇氏『古代印度に於けるイラン文化の影響に関する文献学的研究』一九四九年。京都大学文学部梵文科へ提出の博士論文。未公開。
- (3) Heinrich von Stietencron, *Indische Sonnenpriester Samba und die Śakaditya-Brahmana: eine textkritische und religions-geschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*, Wiesbaden, 1996. ユンコエン大学へ提出の博士論文。
- (4) Alan V. Williams, "Zoroastrianism and Christianity," *A Zoroastrian Tapestry*, Amedabad, 2002, pp. 211-225.
- (5) James R. Russell, *Zoroastrianism in Armenia*, Cambridge, MA, 1987. ロンドン大学SOASへ提出の博士論文。
- (6) 張小貴『唐宋祇教的華化形態』二〇〇六年。中山大学歴史系へ提出の博士論文。未公開。
- (7) Michael Stausberg, *Faszination Zarathustra: Zoroaster und die Europäische Religionsgeschichte der Frühen Neuzeit*, 2 vols, Berlin/ New York, 1998. ボン大学宗教学部へ提出の博士論文。
- (8) Nora Kathleen Firby, *European Travellers and their Perceptions of Zoroastrians in the 17th and 18th Centuries*, Berlin, 1988. マンチェスター大学神学部へ提出の博士論文。
- (9) Jamsheed K. Choksy, *Conflict and Cooperation: Zoroastrian Subalterns and Muslim Elites in Medieval Iranian Society*, New York, 1997 参照。

- (10) H. Fleish, "al-Djawālīkī," *Encyclopaedia of Islam*, vol. 2, 1965, p. 490 参照。
- (11) Mawhūb ibn Ahmad Jawālīqī, *Al-Mu'arrab min al-Kalām al-A'jamī 'alā Hurūf al-Mu'jam*, ed. by Ahmad Muhammad Shākir, Qāhira, 1969 参照。
- (12) R. Jacobi, "Imru' al-Qays," *Encyclopedia of Arabic Literature*, vol. 1, 1998, pp. 394-395 参照。
- (13) T. Seidensticker, "Ḥumayd ibn Thawr al-Hilālī," *Encyclopedia of Arabic Literature*, vol. 1, 1988, pp. 293-294 参照。
- (14) G. J. H. van Gelder, "Jarir ibn 'Atīyya," *Encyclopedia of Arabic Literature*, vol. 1, 1998, pp. 653-729 参照。
- (15) Geo Widengren, *Die Religionen Irans*, Stuttgart, 1965, p. 337 参照。
- (16) 阿拉伯文学史の序説 阿拉伯文学の発展とその歴史 阿拉伯文学の発展とその歴史 Ibid.
- (17) Choksy, op. cit., p. 32.
- (18) Ibid., pp. 13-47.
- (19) Ibid., p. 82.
- (20) Abū Ja'far Muhammad ibn Jarir Tabarī, *Annales, quos scripsit Abu Djafar Mohammed ibn Jarir at-Tabari cum aliis editit M. J. de Goeje*, Secunda Series, III, 1964, p. 1636 参照。阿拉伯文学史の序説 Tabari, *The History of al-Tabari*, vol. 25: *The End of Expansion*, tr. by Khalid Yahya Blankinship, Albany, 1989, p. 168 参照。
- (21) Choksy, op. cit., p. 40.
- (22) Richard N. Frye, *The Golden Age of Persia: The Arabs in the East*, London, 1975, pp. 134-35, p. 140 参照。
- (23) Abū Rayhān Bīrūnī, *Al-Āthār al-Bāqiyah 'an al-Qurūn al-Khālīyah*, ed. by Parviz Azkāei, Tehrān, 2001, p. 257 参照。阿拉伯文学史の序説 Abū Rayhān Bīrūnī, *The Chronology of Ancient Nations*, tr. by C. Edward Sachau, Frankfurt am Main, 1998 (reprint, London 1879), pp. 193-94 参照。
- (24) Choksy, op. cit., p. 117.
- (25) Ibid.